無意識の領域を越えて語られる奇譚

——D. Dominick Lombardi　Shrink Head VIII

藤浪理恵子

アメリカに渡ってから、こちらの美術家達と、制作の動機について話しているとよく『オートマティックドローイング』という言葉を耳にする。内から沸き上がる何かを、認識のフィルターを透さず、画面に表現してゆく。LAの若い作家達は非合法の夢想の中で、認識の解体を模索し、作品は概ね、二日酔のカンディンスキーといった風情に落ち着いてお金と健康を犠牲にしている割に、表装的で脆弱にみえる。無意識の迷路は魅力的だが、作品は、そこを徘徊しつつ、現実の世界に立ち戻ることを作者に要求する。

ドミニク・ロンバーディも無意識の探究者だ。彼の作品の中には、偶然性の要素というものがまるで無い。筆の勢いによるかすれ、ぼかしにじみの類、あるいは盛り上げたマテリアルによる不規則な陰影や物質感——こうした画面への無意識の挿入に欠かせない物を一切用いない。そして完全に意識的手法で、無意識の形を造形する。彼は冷静な目と職人の手を持っている。不思議なことに、私はこの他に類型をみない作家の特に平面の作品に懐かしさを覚える。ドローイングは、滑らかな硬い紙に、純粋な黒で筆跡をのこさず塗られているが、切り取られたようなエッジとそこに現われる顔（の様な形）は浮世絵、特に写楽の大首絵を想い起こさせる。アクリル板の裏面からやはり筆跡をのこさず塗分けられたタブローは、奇抜な、しかし絶妙なバランスの配色を、表面に縦横に紙やすりで正確に〝紗を掛ける〟ことで『粋』に仕上げ、複雑に絡み合う形は情景を産み、百鬼夜行、妖怪草紙、仙境風画といった様で累々と異界の奇譚を語る。

Shrink Head VIII

残念ながらこんな感想は周囲の誰とも共有できないので、単なる孤独な異邦人の密やかな楽しみでしかないが、彼が確かな足取りで闊歩する脳内の迷路で出会う奇妙なそれらが、太平洋を挟んで我々の祖先が、無意識からの不安、幻想、を異形の相に託した絵巻のそれと水脈を通じていると考えることは楽しい。

イタリア系大工の父を持つ彼はその血の中に職人の気質を受け継いでいる。そのヨーロッパの職人気質と現代アメリカの〝オートマティックドローイング〟が反骨と自由を求めた江戸時代の浮世絵師達と共鳴していたら、もっと楽しい。

かなり無茶な独断とこじつけの作家紹介になってしまったが、ぜひ彼のWebを訪ね『今転歩楽理浮世絵師ドミニク—脳内百景』を楽しんでほしい。

www.ddlombardi@optonline.net
D.Dominick Lombardi
画家、彫刻家、美術評論家
ニューヨーク、ボストン、シカゴで個展
1998年よりNYタイムス紙ウエストチェスターエリアの美術批評担当。
1999年よりSculpture Magazineに評論連載

平成17年3月1日発行(毎月1回1日発行)第3巻第227号　昭和63年8月2日第3種郵便物認可

詩と人間を愛するすべての人々のための

詩と思想

2005
NO.227 VOL.3

3

特集　五感をひらく

インタビュー　山下柚実　村田青朔

評論　岡本勝人　吉田義昭

五感紀行　浦野俊之　寮美千子　中村純　三輪郁　狩野敏也

五感絵日記　鈴木翁二

〈日本の詩人〉森ちふく〈巻頭詩〉金光洋一郎〈扉詩〉閤田真太郎